

#### 特集インタビュー

## なにげない言葉が 身近な人を 困らせてはいませんか？

～ハラスメントを考える～

嫌がらせや、人を困らせる言葉・行為をハラスメントといい、セクハラ、パワハラ、マタハラ、モラハラなどさまざまなハラスメントが日常生活で人権侵害として問題になっています。中でも、職場での上司と部下の関係は、ハラスメントの問題が発生しやすいシチュエーションです。

今回は、演出家として、世界各地で役者やスタッフに指示・指導する立場の宮本亞門さんに、仕事上でのハラスメントについて語っていただきました。

### 古い習慣からくるハラスメント

僕がハラスメントを初めて実感したのは、子どもの頃、酒に酔った父親が母親に暴力を振るっていたときのことです。このように人は人を傷つけるんだと知ると同時に、当時はこうした家庭もそれなりにあって、耐えなきゃいけないものだと思っていました。一方で、同じようなことを人にやってはいけないと自分に警笛を鳴らしていました。

演劇の世界でもかつては、指導する立場にある演出家が、役者やスタッフを怒鳴ったり、暴力に近いこともしたりしてしまう行き過ぎた指導がありました。スポーツの世界や学校の部活、職場でも同じです。それらは古い習慣によるものです。現在では、ハラスメントはいけないことだと皆さん知っています。しかし、職場や家庭内まで浸透しているかという疑問が多いと思います。

僕はアメリカでミュージカルを上演することがありますが、日本で常識だと思っていた価値観で仕事をしていると、ハラスメントの加害者になる場合があるという現実を思い知ることがあります。

### 制作側との間に立ち、役者をサポートする専門家

僕は演劇の仕事では、演出家というパワーのある立場です。映画や野球、サッカーでいえば監督の立場です。僕はどちらかというとソフトなタイプの演出家だと思っていたのですが、アメリカで舞台作品をつくっている際に、気付かされたことがありました。

例えば、役者から「このキスシーンはできません、やりたくありません」と言われたとします。それに対して演出家としては、それが役者の仕事だし、台本にキスシーンが書いてあったし、「やるべきでしょう」と言いますよね。でも、もうこれが間違い、古い考え方なんです。役者がやりたくないと思ったら、それを無理にやらせるのはいけないことなのです。

アメリカでは、映画やドラマ、演劇の制作現場に、「インティマシーコーディネーター」という専門家の参加が必要になっています。映画や舞台での、キスシーンやラブシーンなど身体的接触を伴うシーンの撮影に関して、役者が嫌がる演技を強要されることがないように、役者と制作側との間に立って調整をする専門家です。結果的にハラスメントに関する事件が起こることを防ぐので、作品がお蔵入りになるリスクがなくなり、作品に関わる全ての人にとってプラスになるわけです。



みやもと あもん  
演出家 宮本亞門さん